

ノートルダム黙想会
生きている人間、これこそ神の栄光

星野正道

はじめに

今日の黙想は今から約1時間程ですが、皆様の心の中に聖霊が働いて下さって、神様は皆様にいろいろなことを気づかせて下さるだろうと思います。どんなに小さなことも大切にしてください。もしかしたら普段、考えてもいないようなことが出てくるかもしれません。それもまた、こうした時の大切なテーマになるのではないかと思います。普段は隠れているもの、心の奥底に隠れているもの、あるいは何かの思い出などが蘇ってきたりもするかもしれません。それは黙想するという上ではとても大切なことです。あなたが更に深まっていくための大切な要素を神様は照らし出して下さっているとも考えられると思います。

では、その父である神様を讃えて最初に主の祈りを一緒に唱えたいと思います。

父と子と聖霊のみ名によって アーメン

天におられるわたしたちの父よ、

み名が聖とされますように。

み国が来ますように。

みこころが天に行われるとおりに地にも行われますように。

わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください。

わたしたちの罪をおゆるしてください。わたしたちも人をゆるします。

わたしたちを誘惑におちいらせず、悪からお救いください。

アーメン。

生きている人間、これこそ神の栄光

1. 神の御心が開かれる

今日は「生きている人間、これこそ神の栄光」というテーマを掲げさせていただきました。これは一世紀のキリスト教理論家イレネウスという人が語った言葉です。イレネウスはこの言葉を確かに語ったのですが、私にこの言葉を教えてくれた人は、昨年亡くなられましたネメシェギ神父様という日本で長い間、神学生の養成や福音宣教のために働かれたハンガリー人の司祭でした。

私は神父になるために神学校に通っていたわけですが、その時に、その方が主要科目の全部を教えてくださいました。その中で「生きている人間、これこそ神の栄光」というこの言葉を何度も繰り返して教えてくださいました。

私たちは何か不完全なところや、そのように思い至った時には、「ああ、あんなことはしなければ良かった」と恥ずかしくなるようなことがたくさんあるのではないかと思います。

そのような私たちが、どういう風に生きるからではなく、このようにして生かされて在るという、その私たちの人生をいわばキャンバスにして、神様にご自分を描き出そうとなさいます。そこに神様の栄光が現れてくるということです。それが、今日の私のようないい加減で、しわくちゃだらけの画用紙ではなくて、ちょうどここにあるような、何を描いても美しくなるであろうと思われるような真っ白な壁面を使って神様を描いたならば、ご自分をどれだけ忠実に表現することが出来るか分からないのですが、神様はそれは選ばなかったのです。そうではなくて、しわくちゃだらけのあなたを選んだのです。それが神の栄光なのです。その事について今日は考えていきたいと思います。

イエスは人間として私たちの前に現れました。生きている人間として現れていらしたのです。そして、その生きている人間を使って神様にご自分を表そうとなさいました。このイエスが、いわば画用紙になったわけです。画用紙としての一番はじめに人の前に現われてきたのはマタイの福音書の3章にある「主の洗礼」の場面です。

それまでの間、イエス様はヨゼフ様と一緒に大工さんのお仕事をなさったり、マリア様が毎日、煮炊きするための薪を割ったり、いろいろな生活のことをなさったろうと思います。それは新約聖書のどこにも書かれていません。しかし、神様はイエスという人間を使って、ご自分を描き出そうと思ったところ、そこから新約聖書は始まっていきます。

「その頃、洗礼者ヨハネが現れて、ユダヤの荒れ野で宣べ伝え『悔い改めよ。天の国は近づいた』と言った。これは預言者イザヤによってこう言われている人である。

『荒れ野で叫ぶ者の声がする。『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。』』

このように叫ぶ人の声が響く時がくるということを、この新約聖書の時代から約 500 年ほど前にイザヤ書は告げたわけなのです。そして、今まさにイエス様はそのイザヤが預言した通りのことを始めるという話をしているのです。しかし、それに先立って洗礼者ヨハネという人が現われて、主の道を整えて、主の道をまっすぐにするのだということを言っています。

「ヨハネは、らくだの毛皮を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べ物としていた。そこで、エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々がヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。」

ここで大切な言葉は、やって来た人たちはイスラエルのあらゆるところからやって来たのですが、6 節にあるように「罪を告白した」ということです。罪ある者として、自分が罪にまみれているということを自覚したがゆえにヨハネのところに来て、その罪の汚れから洗い清めてもらうということを願ったというわけなのです。

「ヨハネはファリサイ派やサドカイ派の人々が大勢、洗礼を受けに来たのを

生きている人間、これこそ神の栄光

見て、こう言った。『蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。我々の父はアブラハムだなどと思ってもみるな。言うておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。わたしは、悔い改めに導くために、あなたたちに水で洗礼を授けているが、わたしの後から来る方はわたしよりも優れておられる。わたしは、その履物をお脱がせする値打ちもない。その方は聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。そして、手に箕を持って脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて蔵に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。』

こういう人をヨハネは予想しているわけなのです。しかし、それがどういう人なのかということを、ヨハネはまだ知らないでいるのです。ですから、自分以上の人が来る。その人のために自分は道を整えているのだと話しています。

「そのとき、イエスが、ガリラヤからヨルダン川のヨハネのところへ来られた。彼から洗礼を受けるためである。」

彼から洗礼を受けるとはどういうことなのでしょう。それは、罪を洗い清めてもらうために来るということなのです。しかし、イエスは罪なき神の子であります。それなのに、その方が洗礼者ヨハネの目の前に現れたということで、洗礼者ヨハネは驚いている場面です。

「ヨハネは、それを思いとどまらせようとして言った。『わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、わたしのところへ来られたのですか。』しかし、イエスはお答えになった。『今は、止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです。』」

洗礼者ヨハネは、なぜ、そんなことをするのですか。私ごときところに、あ

なたがおいでになるのはどういうことなのですかと聞いています。

「正しいこと」とは、人間が自分で考えていた「正しい」ということではなく、神様の義です。神様にとって、あるべきことをするのは我々にとってふさわしいことですとイエスは話しました。

「そこで、ヨハネはイエスの言われるとおりにした。」

イエスは、罪を洗い清めるための洗礼をヨハネは行っているということを知っていて来ているわけです。ですから、イエスはそれを望んだのです。そして、洗礼者ヨハネは、イエスが望んだとおりに、それを行ったと言っています。

「イエスは洗礼を受けると、すぐ水の中から上がられた。そのとき、天がイエスに向かって開いた。イエスは、神の霊が鳩のようにご自分の上に降って来るのをご覧になった。そのとき、『これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者』と言う声が、天から聞こえた。」

天というのは、今日のようなどんよりと曇っている空に、日が差して来たという空を写実的に考えても良いのですが、ここでは「天」は神の言い換えです。ですから、神様の御心が開かれたということでしょう。神様の御心がここで実現したということなのです。何か、私たちにとって、とても素晴らしい衝撃的なことが起こったということが言いたいのではなくて、神の御心が開かれていった。神の御心がここで実現していったということです。では、その実現していった内容は何であったのでしょうか。それは、罪なきイエスが洗礼者ヨハネから罪人として洗礼を受けたということです。これが天が開かれた意味内容ということになります。また、神の霊とは、聖霊です。神様の力がご自分の上に降って来るのをご覧になった。その時に、天から声が聞こえたということです。

2. 神の正義

ここからはこの「主の洗礼」の場面を教皇フランシスコの教説から一緒に味わってみたいと思います。ここまでも一緒に味わいましたが、主の洗礼の場面は私たちに驚くべき光景を見せてくれます。ナザレの隠れた生活から、イエスがはじめて公の場に姿を現した時です。イエスという人がナザレで暮らしているとは誰も知らなかったし、話題にもならなかった。しかし、この洗礼者ヨハネの洗礼を受けるというときに、はじめて公の場にイエスは姿を現します。

イエスはヨハネから洗礼を受けるためにヨルダン川にやって来たわけなのです。そして、何度も強調しましたが、洗礼を受けるということの意味内容は、しっかり押さえておいてください。それは、罪ある者が、その罪を洗い清めてもらうためにやって来る、その列の最後にイエスが並んだということです。イエスが罪人の一人にまでなったということです。しかし、イエスが罪人たちの間に混じっているのを見て、私たちは驚き、自問するだろうと思います。神の聖なる人、罪のない神の御子イエスがなぜ、このような選択をしなければならなかったのでしょうか。その答えはイエスがヨハネに向かって語った言葉の中に見つけることができます。イエスは「今は止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは我々にふさわしいことです」と言いました。

我々というのは洗礼者ヨハネです。イザヤ書が預言した人です。主の道をまっすぐにする。主の道を準備する人としての洗礼者ヨハネ。そして、準備してもらった神の子イエスというこの二人にとって「正しいことをすべて行うことは我々にとってふさわしいことです」ということです。

正しいことをすべて行うということはどういう意味でしょうか。それは、イエスは洗礼を受けることで、私たちに神の正義とは何なのかということをはっきり告げようとしたということだろうと思います。

では、神の正しさというのは何なのでしょう。洗礼者ヨハネにとって神の正しさは、罪ある身を洗い流してもらって、罪のない状態になることが、神様の正しさということになるだろうと思います。神様が望んでおられるのは

それだと、洗礼者ヨハネは考えていたのでしょう。私たちも、そう考えるかもしれません。

神の正しさ、神が望んでいることは何なのかと言った時に、私たちは神様のお嫌いになる罪を洗い流して、新しい生き方をしていくということが、神の望みなのだというように受け取るかもしれないです。しかし、この神の正義というのは、もっと広い概念を持っているというのがイエスの主張です。

神様の正しさというのは、神様がこうしてほしいと願っていることです。神様がこうしてほしい、こうあってほしい、神様はこういう計画を人間に持っているという神の計画のすべてです。それを神の義と言っているわけなのです。しかし、私たちは神の義と言ったときに、神様の正しさの代表は罪ある者ではなくて、罪がない者になりましょう、間違ったことはしないで、正しいことをしましょう、といった範囲に狭めてしまうのです。しかし、神の義というのはそうではないということをここで言っているのです。

私たちは、しばしば正義について、今、お話ししたように狭い考え方を持っています。正義とは、過ちを犯した人がその報いを受け、そして犯した過ちを償うことが正義だと考えます。最近、政治家がいろいろな失言をやたらにやって、入れ替わってみたい、その職を解かれてみたいしています。この間、少し苦しいけれど、謹慎をして、そのうちにまた、選挙があれば出てくるのです。そして、めでたく当選なさるだろうと思いますが、そういうことを正義というように考えそうになるのです。このように、正義とは犯した過ちを償うことだと考えがちなのです。しかし、神の正義とは、聖書が教えているように、もっとずっと凄いことなのだとすることを、私たちは考えておかないといけないのではないかと思います。

3. 死を象徴する洗礼

神の正義は、過ちを犯した人を罪に定めることを最終目的にするものではありません。神の義とは、過ちを犯した人を最終的に犯罪人として判決を下すということではないです。そうではなくて、その人の救いが全うされること、そして、その人が再生していくことです。

ここで、わざわざ再生という言葉を使ったのですが、聖書全体の言葉で申し上げるのでしたら復活していくということです。復活していくということは、以前のその人にもどるということではありません。その人が自分でも思ってもみなかったような生き方が始まって行くということです。それを神が与えるということです。これが、神の義なのです。ですから、元の状態にもどるわけでもなく、あるいは罪人だと断罪された人が「それでもいいよね。仕方ないよね。人間、誰でも過ちがあるのだから、過ちを犯したというあなたでもいいよ。」と言って、許されるといったようなものではないということです。そうではなくて、全く新しい生き方が、自分でも考えなかったような新しい状態を生き始めていくということです。

神の正義とは、罰や懲らしめを振りまくことではありません。この世の正義はそれでしょう。先程もお話したように、とんでもない失言をした人がいたなら、その人はそれだけの社会的な制裁を加えられて、うなだれていなければなりません。大きな顔をして出て来てもらったのでは困るのです。しかし、神様の正義というのは、懲らしめを振りまくということで終わるわけではありません。

使徒パウロはロマ書の3-22から31の中で「ご自分の子らを悪の罠から解放し、癒し、再び立ち上がらせ、義とされる。」と言っています。これが、神様のプログラムだと言うのです。私たちはいつも、「悪からお救いください。」と祈りますが、悪がとぐろを巻いているのが、この地上の世界ではありませんか。そういう中で、それにはまり込んでしまう人、そういうものに誘惑されてしまう人が沢山いるし、それは、私たちの姿なのかもしれません。

そういう悪の罠から解放することができるのは、神、ただお一人だけではありませんか。私たちは自分でそれができるなら、悪などひとつも怖くないのです。私たちは、分からないで悪の中に入っていつてしまう。そして、自分で分からないだけではなくて、自分でこうすることが正当なのだと思います。が、実は悪を生きてしまう存在なのです。

その罠から解放し、癒し、再び立ち上がらせる。そして義とされる。そういうことが、あるのだということだと思います。

ヨハネ福音書において、「しかしてみことばは人となりたまえり。我らのうちに住みたまえり」とあります。これは、イエスのことです。みことばは、神様のご計画であり、神様のご意志によって肉となり、人となって、私たちと一緒に暮らしてくれたというお告げの祈りの1節です。

私たち一人ひとりを神のことばに変えていこうということです。私という画用紙を使って神のことばをそこに浮かび上がらせていこうとするのです。それが神様のご計画ということになります。これによって、ヨルダン川のほとりでイエスが啓示したその使命の意味を理解することができると思います。

イエスは神の正義を完成するために来られました。神の正義の完成とは、罪ある人が、あるいは限界ある人間が、ただ打ちひしがれて社会から除け者にされて、うなだれて生きていくことで悔い改めを全うしていくという世界ではないということです。

それをしたって良いのです。また、そういうことがあっても良いのです。そうやって自分が反省するということがあっても良いのです。全く反省もないというのなら、それは困ります。しかし、今、お話してきたように、それで終わるものではないということです。そして、その神の正義とは、罪人を救うことです。救うということは、ただ許すということではありません。なかった事にしてあげるという、上から目線の問題でもありません。

その人をもう一度再生していく。これまでの生き方ではない、全く違う新しい生き方へ導いてくれる。そして、ご自分の肩に世の罪を背負い、私たちが溺れないように奈落の水、死にまで下りていかれたのがイエス様の姿だったわけです。

死まで下りていかれた。それは、十字架の場面でよく見えてきます。十字架にかけられたイエスはマリア様をはじめとする女性たちによって、夕方、十字架から下ろされて、新しい墓に葬られることになります。

墓の中にまで下りていかれた。その墓の中でうごめいている人たちにまで救いを与えていったのです。それが聖土曜日です。

復活祭の典礼で言うのであれば、聖木曜日が主の晩餐の日で、聖金曜日が十字架の日です。そして、聖土曜日は何も典礼はないのです。ご聖櫃は開けっ

生きている人間、これこそ神の栄光

放しなのです。何も入っていません。では、その時、イエス様はこの世界から存在をお消しになったのですか。

そうではありません。墓の一番深いところにまで、人の死の一番深いところにまで行って、もう誰も再生させることのできない人たちのところにまで出向いて行った。それが聖土曜日です。

そこまで下りて行った。その象徴が、ヨルダン川での主の洗礼なのだということを教皇さまは言おうとしているのです。ご自分の人生の最後、墓にまで下りていかれたその人生の最後を先取りする形で、最初に罪人の列に並び、ヨルダン川の水中に自分を沈めたのです。だから、洗礼は死の秘跡なのです。死を象徴しているわけです。

ですから、今日、ここにおいでくださった方の中で、洗礼をお受けになっていらっしゃる方もたくさんおられるのではないかと思います。その洗礼は、あなたの死を象徴しているということなのです。そして、そのあなたの死にまで同伴したのが、その時に洗礼の主体となっているイエスの心ということになります。死んで復活していくということです。ですから、イエスもその道を通られたということです。

イエスは真の神の正義とは救う慈しみであり、私たち人間が置かれた状況を分かち合い、寄り添う愛、これが真の神様の正義なのだと告げたのです。我々の苦しみへの連帯、私たちの闇の中に入り、光を再び灯そうとする努力、これが神の正義だということになります。

4. アメイジング・グレイス（驚くべき恵み）

ここで、18世紀に書かれたアメイジング・グレイスという聖歌を味わってみたいと思います。この曲の歌詞は、当時、アフリカからアメリカに奴隷を運ぶ仕事をしていた奴隷船の船長によって書かれ、どなたかが曲をつけたという聖歌です。主にアメリカの黒人の方々の間で歌われ、今ではいろいろな人が歌うようになりました。

イギリス人であったその船長は後に、自分がそういう仕事をしていたということを大いに恥じて、その仕事から足を洗って、別の生き方をするように

なりました。その自分の人生を振り返って書いたものがこのアメイジング・グレイスなのです。そして、これは多くの人の人生に重なりあっていくものではないかと思います。

アメイジング・グレイス

1. おどろくべき めぐみ なんと快い その響き
わたしのよう な 恥知らずな者まで 救い上げてくださった
そのめぐみ
かつて道に迷い あなたを見失ったわたし しかし今わたしはあな
たに見いだされています
かつて何も見ることの出来なかったわたし
しかし 今 わたしは見えるのです あなたが
2. そのめぐみが わたしの心に あなたへの畏れを教えながら
わたしの恐れを解き放ったのです
今まで たくさんの危険 たくさんの苦労 たくさんの誘惑の中を
わたしは生きて来た
しかし このめぐみが わたしをここまで安全に
運んでくれたのです
そして また このめぐみこそが わたしを
天の家へと導いてくれるでしょう
3. 一万年の時を経たその時にも そのめぐみは太陽のように輝き
わたしたちは日々歌います
神よ、あなたへの賛美の歌を
わたしたちがあなたを知った 最初の時にも増して

この驚くべき恵みというのが、神の義なのです。この方はイギリスの方でしたから、小さい時から洗礼を受けて、教会生活を送っていたわけなのです。

生きている人間、これこそ神の栄光

しかし、奴隷船の船長になって、1回の航海に何十億円ものお金が儲かって、そうすることによってアメリカでの産業も発展していきました。良いことだらけです。ですから、そうやって社会貢献をしていくこの仕事こそ、素晴らしいものはないという自負心を持って彼はやっていたわけなのです。

しかし、彼は言っています。私は神様のことを見失ってしまうことが多々ありました。でも、神様は私を見出してくださる。必要な時には、「あなたを見出したよ」ということを必ず合図してくれるということを話しています。そのことによって、この方は導かれていったわけです。

日本語には「畏れ」と「恐れ」という2つの漢字があります。それは素晴らしいことです。あなたへの畏敬の念が私の中でどんどん大きくなって、あなたが素晴らしい方だということ、あなたが人間では考えられないほどのイメージング・グレイスであると知れば知るほど、わたしの中の恐れがなくなっていったということです。

普通はそうではありません。他の宗教を見てください。「神様はこんなに厳しいですよ。このくらい、たくさんの献金を持って来なければ、あなたの家族なんか救われないのです。あなたにはまだ、土地もあるし、親が残してくれたマンションもあるでしょう。そういうものをみんな売っぱらって持ってくるのですよ。それでやっと、どうにかなるんです」と言って、知れば知るほど神様というのは恐ろしくなるのです。しかし、真の神はそうではありません。それを言っているわけです。

そして、このめぐみこそが私を天の家へと導いてくれるでしょう、という希望を持てる男に神様は変えたのです。ですから、ただ奴隷船の船長をやめたというだけのことではないのです。全く別の人になってしまったということなのです。これが復活なのです。

そして彼は、世の終わりが来るまでのことを象徴して「一万年」という言葉を使っているのですが、時を超えてということです。時が経てば、どんなものもみんな廃れて行くのです。私も、もう少しかな、皆様にお会いするのも最後になるかもしれないと思います。

時が経てば経つほど衰えて行くというのはこの世の常です。しかし、ここで言っていることは一万年という考えられないほどの時が経ったとしても、

そのめぐみは日々、新しくなっていくということだと思います。これがキリスト教の言おうとしている終末です。救いの完成ということなのです。

ですから、ある完成された状態が、そこで写真に撮るように釘づけにされるということではありません。アウグスティヌスという人が、ある本の中の最後のところで言いました。終末とは何なのかということについて語っているのです。「これこそ終わりだ、終わりのなしの。」と言っているのです。これこそ完成なんだと言うのです。それは終わることない完成なのだということです。だからと言って、その状態が不完全だということではないのです。完全なのです。完全なのですが、終わりのない状態ということを言っているのです。この方もここで言っているのは、それなのです。

例えば、二十歳で洗礼を受けたという人がいたとしましょう。その方が今、70 歳になったとすると 50 年が経っているわけです。その方はそれだけ古びてくるわけです。しかし、その最初に洗礼を受けた時よりも 50 年経った時の方が余程、生き生きとしていて新鮮なのだということです。これがアメイジング・グレイスであり、それだけではなくて、神の義というものであるということだと思います。

フランシスコ教皇様の前の教皇であったベネディクト 16 世は次のように話しています。

「神は私たちをお救いになろうと、自ら死の深みの底まで下られました。すべての人、たとえ、もう空を見ることが出来ないほど低いところまで落ちた人でも、神のみ手を見いだし、それにつかまり、闇から抜け出し、再び光を見ることができるようになるためでした。」

これがイエスが墓の底にまで下って行った、つまり、十字架の死まで至り、そして墓にまで納められた理由だったということを教皇様は言っているわけです。そして、更に「人は光のために造られているからです。」とおっしゃっています。

ただ、自分の失敗や、自分の至らなさや、自分の足りなさの中で、うなだれて生きていいということではないのです。それは神様が許されないのです。だから、あの手この手を使って神様はそうでないところへと連れて行くので

生きている人間、これこそ神の栄光

す。たとえ信者でなかったとしても、聖書を読んだことがなかったとしても必ずそういうところへ連れて行こうとします。

教皇は次のようにも言っています。「私たちイエスの弟子たちは、他者との関係や、教会や社会において、人を良い人と悪い人に分けて裁き、罪に定める冷たさばかりではなく、兄弟姉妹が立ち上がれるようにと、その傷や弱さを分かち合って受け入れる慈しみをもって正義を行うように招かれています。」と語っておられます。つまり、この神に似た者になるように招かれているのだということなのです。あんな人はダメなのよと言って決めつけ、断罪してしまうのではなくて、そうではない道、イエスを通った道を歩くように招かれていますということです。

5. そのままの自分を受け入れる

このように私たちが生きていくために必要なことについて現代の社会は、自己肯定感というものが大切なのだとよく言います。自己肯定感というのは、自分は大丈夫だとか、自分には価値があると思えるということです。

かなり前になりますが、文部科学省が日本の中学生、高校生にアンケートを出して、「あなたは自分は大丈夫だと思いますか。自分は何とかなっていると思いますか」と聞きました。この時、日本、韓国、中国、アメリカなど4カ国の子供たちにも聞いたのです。すると、中国やアメリカの高校生たちは80%の人たちが、自分は大丈夫だと思っていると答えたのです。日本の中学生、高校生は25%の人しかそのように答えた人はいませんでした。

他のすべての自己肯定感に関する質問に対しても、日本は30%を超えることはなかったのです。他の国々はすべて70%以上、高いものは80%以上でした。そこで自己肯定感というのは、どういうものなのかということを、今日はここで少し考えてみたいと思いました。

突然ですが皆様に5つの質問をします。あなたが、あるいは日本の子供たちが自己肯定感を高めるために一番大切なものは次の5つのうちのどれでしょうか。

1. そのままの自分で OK だと許すこと
2. 自信をつけること
3. 自分の能力を磨くこと
4. 新しいことに挑戦すること
5. 自分を好きになること

この中のどれが自己肯定感を上げていくために大切なのでしょうか。どれも生きていく上では大切なものなのです。しかし、自己肯定感を高める上で絶対に欠かせないことは、すべての心理学者が言っているように、1 番の「そのままの自分で OK だと許すこと」なのです。

それは、イエスが洗礼者ヨハネのところにやって来て、洗礼を受けるのだと言ったことに見ることができます。彼はそのまんまの自分で OK だから来たのです。他のファリサイ派やサドカイ派の人たちは、イエスよりも余程、社会的身分は高いです。そして、人々から羨ましがられるような階層に属しています。でも、彼らは自分たちがダメだから洗礼を受けに来たのです。その違いなのです。

そのままで OK と言って許すことが自己肯定感を育てる上で最も大切です。自己肯定感を高めるということは、イコール能力を磨いたり、自信をつけることではありません。ダメな自分を変えて、出来ることを増やしていくということでもありません。自己肯定感というのは、どんな自分でも OK なんだと思っているということなのです。

それをアメリカの高校生も中国の高校生も答えたのです。テストで合格しないこともある。スポーツ競技に出て、1 位になって優勝カップを貰えないこともあるかもしれないのですが、そういう自分で OK なのだとは彼らは答えたのです。しかし、日本の子供たちは、いつも 1 位でないからダメだと言って、25% しか丸を付けなかったのです。

この日本の状況は、何も若者の問題だけではありません。ここにいる方たちも今から50年前は若かったのです。高校生や中学生だったのです。そういう時から常に、自信をつけ、自分の能力を磨き、新しいことにどんどん挑戦して、自分がもっと魅力的で好きだということになって行かなければダメだと言われ続けたのです。しかし、そんな風になれる人はいないので、みんな自己肯定感が下がってしまったのです。

自信がない自分を全否定したり、否定から抜け出すために無理やり自信をつけたりするのではなく、自信がないのも自分なんだと受け入れることです。自信がついてから、それが肯定できる自分だといっているのであるなら、次に何かがあって自信がなかったらどうするのですか。また、元に戻るのですか。そういう風に行ったり来たりしているのが日本の子供たちなのです。特に、私が大学で教えていて彼らを見てみると、如実にそれは分かります。可哀想だなあと思います。しかし、自分もそうだったのだなあと思うのです。いまは多少、面の皮が厚くなって、そんなにドギマギしなくなったただけのことであって、私がそのまま、50年前に戻れば、この子たちと同じなのだと思います。

自信がないのも自分なんだと受け入れること。今は自信がないほど落ち込んでいるんだなあ。でも、これが自分なんだと言えるということなのです。

ですから、最悪なのは、自分を責めるということなのです。出来ない自分がいるならば、そんな自分なんて、自分でOKだなんて言えません。どんな自分もOKだなんてとても思えないと思うだろうと思います。しかし、自己肯定感を高める上で、一番良くないのは自分を責めることなのです。もし、あなたがそういう風に言えない自分を、また責めてしまうのであれば、そんなことはやらない方がよいということです。出来ない自分を受け入れられないと悩むくらいなら、出来ない自分を受け入れられなくてもいいんだと思ってしまえば良いのです。

出来ない自分を責めるような方向性でいつも自分を成長させようとしている人は、聖書の中で言うのであれば、非常にイエスを苦しめたあのファリサイ的な態度になっていくだろうと思います。例えば皆様に対して親か、お友

達か、あるいは夫か妻が、「何で出来ないのか、みんなできていることなのに」と、あなたを責めたてるとします。「このままじゃ、ダメじゃないか。あなたはもっと変わらなければダメなのよ。」ということを常に言うてくる人があなたのそばにいたとします。そういう人とあなたは一緒にいたいですか。もしかすると、あなたが言ってしまうかもしれません。しかし、言われるのは嫌でしょう。

「あなたはもっと変わらないとみんなから評価されないよ」と、そんなことばかり言っている人のことをあなたは嫌い、できることなら、その人にできる限り会わないで済むようなことを考えるのではないのでしょうか。しかし、それをあなたに一番言っているのは、あなた自身です。あなたがこれを言っているのです。

これではダメ。もっと輝かなければダメといい続けているわけなのです。ですから、あなたが一番不得意な人と一緒に、いつもいるということです。夫なんかちょっと買い物に行けば、家の中にいないでくれて、せいせいしているじゃないですか。その間、あなたは避難してられるわけです。しかし、もっと痩せなくっちゃ、もっと綺麗にならなくっちゃと、そんなことばかり言っているのはあなた自身なんだということなのです。あなたは、自分いじめの名人になってしまっているのです。それが、先程の高校生のアンケートに出てきているのではないかと思います。そういう意味では理想が高いのです。しかし、理想が高いということは、理想の持ち方を間違えると自分いじめの名人になって、理想が、生涯死ぬまで、あなたに平安を与えないものになってしまうのです。

そういうものを理想と言えるのでしょうか。どうでしょうか。何かあった時には戦争が始まるのではないですか。ウクライナの戦争を見ていくと、この問題が出てくるのです。ロシアは自分の国をどういう風に見ているのかということです。どうならなければいけないと言って、どれだけ負荷をかけたのでしょうか。どれだけ自分の国民や自分の国家を苦しめたのでしょうか。そして、一旦何かが起こった時には、外に向かって爆発して行くのです。

6. 苦しみが教えるもの

さて、ここからは吉野源三郎さんが書かれた「君たちはどう生きるか」をヒントに、この事をもう少し考えてみたいと思います。この作品は、昭和10年代に出版されたものでしたが、宮崎駿さんによって今年中にはアニメになって映画館で上映されるそうです。この作品は話題になるだろうと思います。

ここには一人のおじさんと少年が登場してきます。とても良く勉強のできる旧制の中学に通う14歳のコペル君というあだ名の男の子と、お母さんの弟であるおじさんが出てきて、いろいろな事について話し合うということなのです。

ある時、上級生がコペル君のクラスの子供たちを虐めるんだと言い出したのです。高校生というと17歳くらいで体もとても大きいのです。こちらはまだ14歳ですから殴られたりしたら大変なのです。中学2年生でも体の大きな子がいたのですが、その子が虐められるということになった時に、コペル君は「どんなことがあっても僕は君を守るからね。だから安心していいよ」と言ったのです。

しかし、本当に上級生がこの子に襲いかかって、ボコボコに殴りつけた時にはコペル君はそこに行くことも出来なかったのです。足が一步も前に進まなくて、助けに行くことも出来ませんでした。他の友達行行って、みんなボコボコに殴られたのです。しかし、コペル君は行かれなかった。行かれなかったことによって、彼は学校に行けなくなってしまいました。そして、10日も20日も学校を休んで家に寝ているわけです。お母さんもその理由は分かりませんでした。

そういう事を前提に考えてみてください。次のような文章がこの本の中に出ています。

「僕たちが悔恨の思いに打たれるというのは、自分はそうでなく行動することもできたのにと考えるからだ。」

自分の中にそうではない行動ができたはずなんだ。それなのに、こんな行動しかとれなかった。コペル君で言うのであれば、それだけの能力が自分に

あったのに助けにいくために走ることが出来なかった。これが「悔恨」という、自分を責めるということの中にあるということを言っているわけなのです。

責めるということではなくて、自分の過ちを認めるということは辛いことです。しかし、過ちを辛く感じるということの中に、人間の立派さがあるのだと言っています。

人間の立派さとは、過ちが辛い、どうしてあの時、自分はこうできなかったのだろうかと思うということに価値を見ているのです。人間は誰にでも過ちがあり、その過ちの意識というのは、苦しい思いを舐めさせずにはいません。

「コペル君、お互いにこの苦しい思いの中から、いつも新たな自信を汲み出して行こうではないか。」とおじさんは言うのです。この苦しみの中から新たな自信を汲み出していこう。では、何が自信なのでしょう。自分には、あの行動ではない別の行動が出来るのだということをこの苦しみは私に教えてくれているのです。それを生きていこうよということをおじさんは提案するわけなのです。

マタイ福音書の5章の4節に山上の説教という場面がでています。その中に「悲しむ人は幸い。その人は慰められる」という言葉があります。

悲しむ人は幸い、聖書の中で一番悲しんだ人は誰でしょうか。それはペトロだと思います。ペトロはイエス様から「お前は今晚、鶏が鳴く前に三度、私のことを知らないということになるよ。」といわれたのです。するとペトロは「絶対にそんなことはありません。どんなことがあっても、あなたを守ります。ここにいる11人の他の弟子たち、このぼんくらどもがみんな逃げてしまっても、私はあなたのところに駆けつけて、あなたを守ります。安心してください。」と言ったのです。

イエスが裁判にかけられた時、イエスのことが心配でしかたないので、ペトロは大祭司の館に入り込んで行きました。その時に周りの女性たちから、「あなたもあの男の仲間でしょ。あなたのガリラヤの訛りで分かるよ。あの男と同じ喋り方をするじゃないか。だからあなたはあの人の仲間なんだよ」と

生きている人間、これこそ神の栄光

言われたのです。

その時にペトロはどうしたのかと言うと、「呪いの言葉すら吐いて」というのです。イエスに対する呪いの言葉を吐いたのです。「あんな人間は人間じゃないんだ」と言ったということです。呪いの言葉すら吐いて、イエスのことを知らないと言ったのです。その時、裁判にかかっているイエスがペトロの方を見たのです。そして、目と目が会ったのです。ペトロは目を合わせることが大変辛かったけれど、これが今生の別れだと思うから見つめたのです。

その時にイエスの目は、まったくペトロを責めていなかったのです。「ペトロよ、それが人間なんだよ」と言って眼差しを向けてくれたのです。

この最後の眼差しを向けられたペトロは、第一代の教皇となって、ローマにまでキリスト教を宣教していくわけです。そして、先生と同じ十字架にかかるなんて勿体ないと言って、逆さ十字架にかかって殉教していきました。これほどの人間に変えられていくわけです。

ですから、今日は神の義ということからお話を始めましたが、それは私たちの非常に近くにあるものだということなのです。そして、神の義というものを、どういう風に捉えていくかということによって、自分に対する態度が変わっていくでしょう。それが今、とても必要とされている時なのではないかと思います。

今の社会は、自分を責め、他人を責める人ばかりです。そして、そういうものがインターネット、その他のものを通してたくさん語られる時代です。その時に、神様の義とは一体何なのかということを見つめていくと、人が人になっていくために何が必要なのかということが分っていくのではないかなと思って今日はお話をさせていただきました。

どうもありがとうございました。

付記 本稿は2023年2月18日（土）京都ノートルダム女子大学カトリック教育センター主催「ノートルダム黙想会『生きている人間、これこそ神の栄光』」における講話を文字起こししたものである。